

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2013

課題番号：24710281

研究課題名(和文) 現代インドのナーグプル市における仏教への改宗運動とキリスト教への再改宗

研究課題名(英文) The Religious Conversion to Buddhism Movement and Reconversion to Christianity in Nagpur City in Contemporary India

研究代表者

根本 達 (NEMOTO, Tatsushi)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：40575734

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は現代インドのナーグプル市で仏教への改宗運動に取り組む仏教徒(「不可触民」)と仏教への改宗後にキリスト教へ再改宗した「改宗キリスト教徒」を対象とし、後期近代に勃興する宗教間対立を逃れ、宗教融和へ向かう脱近代的な生き方を検証することを目指した。計4回の現地調査を実施し、同市における各宗教の歴史と関係性、「改宗キリスト教徒」による再改宗の理由と日常的な宗教実践、一般の仏教徒が神の視点を取り入れることで創出する宗教間対立を逃れる場の存在などが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to examine how religious conflict could be avoided and a non-modern way of life could be built, moving toward religious reconciliation in Nagpur city in contemporary India. It focused on Buddhists ("untouchables") who have engaged in religious conversion movement and "converted Christians" who have reconverted to Christianity after conversion to Buddhism. Using information gathered over four periods of fieldwork, it clarified the histories and relationships of different religious communities in Nagpur city; the reasons that "converted Christians" reconverted to Christianity, and their daily religious activities; and how ordinary Buddhists have created a place where they can avoid religious conflict by adopting God's point of view as their own perspective.

研究分野：南アジア研究

科研費の分科・細目：地域研究、地域研究

キーワード：現代インド 宗教社会運動 アンバードカル 仏教徒 改宗 差別

1. 研究開始当初の背景

1990年代初頭からの経済自由化政策以降、急速な経済発展を遂げるインドでは、多国籍企業の進出や国外に居住するインド人(NRI)の増加など、グローバル化が加速化している。一方、国内では、経済・教育格差の拡大、環境破壊や原子力リスクなど、近代化による困難に直面しており、後期近代(再帰的近代)に突入しつつある(ベック 1998, ギデンズ 1993)。地域共同体や家族集団、さらに国家も既存の影響力を失いつつある現在、個人化した人々は不安や欲求不満に陥り、それらに応えるかたちで、ヒンドゥー・ナショナリズム運動をはじめ、様々な排他的な共同体間の暴力的対立が発生している(アパドゥライ 2010, 関根 2006)。本研究は、このような時代の中に埋め込まれたマハラーシュトラ州のナーグプル市を対象地域とする。同市では、「不可触民の父」と呼ばれるB・R・アンベードカル(1891-1956)によって、1920年代から「不可触民」解放運動が開始され、1956年10月14日、同市において30万人以上の「不可触民」が仏教へ集団改宗した。現在、仏教徒たちはブッダやアンベードカルの教えを広めるために様々な仏教団体を組織し、東南アジアや北米、中東の仏教徒たちとトランスナショナル・ネットワークを構築している。

この改宗運動は、これまでに700万人以上の仏教徒を生み出し、インド社会に大きな影響を与え続けており、2000年代以降、インド国内を中心にアンベードカルへの学術的関心が高まっている(Ganguly 2005, Rodrigues 2002)。特にウツタル・プラデーシュ(UP)州において「不可触民」を支持基盤とする大衆社会党が政権を獲得したことなどから、現地調査に基づく研究の多くがUP州の仏教徒を調査対象としている(Hardtman 2009, Narayan 2011)。一方、1956年集団改宗の地ナーグプル市は、現在も改宗運動の中心地であるにもかかわらず、同市の仏教徒が他宗教に排他的・暴力的であるとされることなどから、Zelliot(1969, 1996)を除き、これまで現地調査に基づく研究がほとんど行なわれていない。そのため、国内外の南アジア地域研究において、大きな空白となっている。このような学術的背景の中、これまでナーグプル市の仏教徒居住区において16ヵ月にわたる現地調査を実施し、仏教徒活動家、仏教僧、仏教信者それぞれの視点を取り上げ、仏教徒共同体内部の関係性・動態性を検証してきた(根本 2010)。

このような状況を踏まえると、今後の研究に求められるのは、仏教共同体と他宗教の共同体間の関係性を検証することである。ナーグプル市は仏教への改宗運動の中心地である一方、植民地時代から現在までキリスト教

の布教活動が行われており、同市には、布教活動の影響を受け、仏教からキリスト教へ再改宗した人々がいる。これらの人々は「改宗キリスト教徒」と批判的に呼ばれ、キリスト教への改宗後も仏教への信仰を捨てずに、両宗教を同時に信仰している。このような状況に対し、仏教徒たちは「アンベードカルを裏切った人々」として「改宗キリスト教徒」を差別・排除するとともに、仏教へ再び改宗するように働きかけを行っている。そして、両宗教共同体による再改宗と再々改宗の取り組みを通じて、ナーグプル市では宗教間対立が発生している。本研究では、グローバル化の中で宗教間対立に直面するナーグプル市において、宗教共同体間の境界に立つ「改宗キリスト教徒」に目を向け、宗教融和へ向かう生き方を考察する。

2. 研究の目的

本研究は現代インドのナーグプル市において、仏教への改宗運動に取り組む仏教徒(「不可触民」)たちと、仏教へ改宗した後にキリスト教へ再改宗した「改宗キリスト教徒」を研究対象とし、後期近代(再帰的近代)において勃興する排他的な宗教間対立を逃れ、宗教融和へ向かう脱近代的な生き方を明らかにする。本研究の主な目的は以下の3点である。

(1) まず、仏教徒共同体とキリスト教徒共同体との協調・対立関係について歴史的に検討する。そのために、アンベードカルの伝記(Keer 1971など)、仏教徒たちの自伝(Moon 2002など)、キリスト教宣教師の記録(Robertson 1938など)を用いるとともに、仏教徒とキリスト教徒へのインタビューを実施する。これにより、イギリス植民地支配下にあった1900年代初頭から、後期近代に入りつつある現在までの期間において、両宗教の共同体間の関係性がどのように変化してきたのかが明らかになる。

(2) 次に仏教徒による「改宗キリスト教徒」への差別に目を向け、差別に抗する被差別者(「不可触民」)の中で、さらに被差別者(「不可触民」)の中で被差別者(「改宗キリスト教徒」)が創出される差別構造を検証する。仏教徒たちは、近代的なアンベードカルの教えを学び、宗教間に明確な境界線を引き、それぞれの宗教を分類する思考様式を持っており、一人の間は一つの宗教のみを信仰すべきと考えている。これらの仏教徒たちは、「改宗キリスト教徒」を「アンベードカルを裏切った人々」と批判し、仏教を完全に破棄するか、仏教へ再び改宗するか、どちらか一つの宗教のみを信仰するように働きかけている。一方、「改宗キリスト教徒」は、差別や排除の対象となりながらも、キリスト教へ

再改宗した後も、キリスト教だけではなく、仏教への信仰も継続しており、二つの宗教の境界に立つ人々である。また、ナーグプル市には二つの宗教の境界に立つ人々として「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」と呼ばれる仏教徒も存在する。「半仏教徒・半ヒンドゥー教徒」は仏教への改宗後もヒンドゥー教と仏教の両者を信仰している。

(3)そして、排他的な宗教共同体間の境界に立つ「改宗キリスト教徒」による日常の実践に着目し、再改宗の理由などを明らかにするとともに、その脱近代的な生き方を考察する。「改宗キリスト教徒」は、宗教間に明確な境界線を引く近代的な切断・分類の論理を逸脱する存在である。その脱近代的な生き方に目を向けることにより、再帰的近代化する現代世界において勃興する宗教対立を逃れ、宗教融和へと向かう脱近代的な生き方が明らかになる。そして、この生き方を映像として記録する。

本研究の学術的な意義と独創的な点として以下の3点をあげることができる。

アンベードカルが開始した改宗運動は1900年代以降のインドにおいて最大の「不可触民」解放運動である。近年、アンベードカルへの関心の高まり、また、UP州における大衆社会党の政治力の拡大などから、現代インドの仏教徒を対象とする研究が増えている。しかし、改宗運動の中心地であるナーグプル市の仏教徒はほとんど取り上げられていない。本研究は同市の仏教共同体を研究対象とし、同市における各宗教共同体の歴史や、宗教共同体間の関係性を明らかにするものであり、これまでの南アジア地域研究に存在した大きな空白を埋めることができる。

次に、本研究を通じて差別論の発展に貢献することができる。本研究は境界的存在である「改宗キリスト教徒」にボトムアップの視点から接近することにより、「被差別者の中の被差別者」が創出される差別構造を明らかにするものである。この差別構造は、現代インドのナーグプル市に限られたものではなく、他地域においても共通の構造を見出すことができる。

また、本研究の成果は、文化・映像人類学の発展に資するものである。「改宗キリスト教徒」の日常実践に着目する本研究を通じて、再帰的近代において勃興する排他的な宗教間対立を逃れ、宗教融和へと向かう生き方が検証され、映像として記録される。さらに、この研究成果は、現代世界の多様な地域で発生している宗教・民族紛争を解き明かすために重要な視点を提示するという一般性に開かれている。

上記(研究開始当初の背景及び研究目的)の引用文献:

アバドゥライ、アルジュン『グローバリゼーションと暴力』(藤倉達郎訳)世界思想社、2010。ギデンズ、アンソニー『近代とはいかなる時代か?』(松尾精文・小幡正敏訳)而立書房、1993年。関根康正『宗教紛争と差別の人類学』世界思想社、2006。根本達「不可触民」解放運動とともに生きる仏教徒たちの民族誌」筑波大学博士学位請求論文、2010。ベック、ウルリッヒ『危険社会』(東廉・伊藤美登里訳)法政大学出版局、1998。Ganguly, Debjani, Caste and Dalit Lifeworlds, Oxford University Press, 2005。Hardtmann, Eva-Maria, The Dalit Movement in India, Oxford University Press, 2009。Keer, Dhananjay, Dr. Ambedkar Life and Mission. Popular Prakashan, 1971。Moon, Vasant, Growing Up untouchable in India. Vistaar, 2002。Narayan, Badri, The Making of the Dalit Public, Oxford University Press, 2011。Robertson, Alexander, The Mahar Folk, Kaushalya Prakashan, 1938。Rodrigues, Valerian, The Essential Writings of B.R. Ambedkar. Oxford University Press, 2002。Zelliot, Eleanor, Dr. Ambedkar and the Mahar Movement. University of Pennsylvania, 1969。Zelliot Eleanor, From Untouchable to Dalit: Essays on the Ambedkar Movement, Manohar Publications, 1996。

3. 研究の方法

本研究は、(1)先行研究のレビュー、(2)仏教徒による改宗運動の中心地であるナーグプル市における現地調査、(3)研究成果の発表という、三つの段階から成る。(1)平成24年度は、先行研究のレビューとともに、英語とヒンディー語を用いて本研究の基盤となる第一次・第二次現地調査を実施する。調査期間は、平成24年7月(2週間)と平成25年3月(2週間)に合計1ヵ月間実施する。主な調査地となるのは、仏教組織やキリスト教組織などの宗教団体、仏教寺院や教会などの宗教施設、各宗教信者の居住区である。特に、これまでの現地調査から、ナーグプル駅に隣接するS地区において仏教徒と「改宗キリスト教徒」が混在して暮らしていることが明らかになっており、この地区における調査が中心となる。同地区は、ナーグプル市内でも経済的に貧しい人々が暮らしている地域であり、経済的な援助を含め、キリスト教の布教活動が熱心に行われている。これに対し、仏教徒活動家は、「改宗キリスト教徒」を再々改宗させる取り組みを行っているため、同地区では、仏教徒とキリスト教徒の間で対立が発生している。

(2)平成 25 年度は、平成 24 年度の研究成果を踏まえ、第三次・第四次現地調査を実施する。調査期間は、平成 25 年 7 月(2 週間)と 11 月(2 週間)に合計 1 カ月間となる。主な調査地は、仏教組織やキリスト教組織などの宗教団体、仏教寺院や教会などの宗教施設、各宗教信者の居住区となるが、平成 24 年度の調査結果を踏まえて判断する。その後、2 年間の研究成果を取りまとめ、映像資料も用いながら、学術誌(『文化人類学』や『南アジア研究』など)や学会(文化人類学会や南アジア学会など)において研究成果を発表していく。

本研究では、インドにおける調査が最も重要であるため、これまでの調査研究を通じて形成されたナグプル市およびデリーにおけるネットワークを活用する。特に、ナグプル市での現地調査では、現地に滞在する日本人仏教僧である佐々井秀嶺師の支援を受ける。また、現地で大学教員を務める 2 名の研究者に調査補助兼通訳を依頼する。両者は英語、ヒンディー語、マラーティ語が堪能であり、インタビュー対象者がマラーティ語のみを使用する場合は、調査補助を務める現地研究者が通訳を担当する。研究対象である改宗運動は、他宗教に排他的、時に暴力的な行動をとることを一つの理由として、現地調査に基づく学術的研究はこれまでほとんど行なわれてこなかった。特に仏教以外の宗教を信仰する研究者が現地調査を行うことは大変難しい。しかし、現地では、現在の改宗運動の指導者が日本人仏教僧の佐々井秀嶺師であること、日本人が仏教徒として認識されていることなどから、調査を実施することに困難はない。すでに合計 16 ヶ月間にわたる現地調査を行っており、佐々井師や現地の仏教徒たちと良好な関係を築いている。本研究では、これまでに構築したナグプル市でのネットワークを活用していく。

現地調査において十分な情報が得られない場合など、研究が予定どおりに進まない場合に備え、現地調査と現地調査の間の期間に実施した現地調査の結果とりまとめを行い、それに基づき、これから実施する現地調査の計画練り直しを実施する。2 年間の研究期間の中に合計 3 回の研究計画練り直しの機会を設けており、その機会には、他の地域研究専門家に助言を求め、柔軟に計画練り直しを行う。また、2006 年から 2008 年までの 2 年間、デリーの在インド日本大使館の政務班専門調査員を務めた経験を活かし、インド政治・経済・国際関係に関する学際的な視点を取り入れるために、その際に構築したデリーでのネットワーク(デリー大学と JNU 大学の教員や研究員、各国大使館職員、インド政府関係者、現地の NGO・NPO など)を利用する。

4. 研究成果

本研究では現代インドのマハーラーシュトラ州ナグプル市において仏教への改宗運動に取り組む仏教徒(「不可触民」と、仏教からキリスト教へ再改宗した「改宗キリスト教徒」)を研究対象とし、後期近代において発生する排他的な宗教間対立を逃れ、宗教融和へ向かう脱近代的な生き方を考察した。本研究の目的は、(1) 仏教徒共同体とキリスト教徒共同体との協調・対立関係について歴史的に検討すること、(2) 差別に抗する被差別者(「不可触民」)の中で、さらに被差別者(「改宗キリスト教徒」)が創出される差別構造を検証すること、(3) 両宗教の境界に立つ「改宗キリスト教徒」による日常の実践に着目し、再改宗の理由などを考察するとともに、その脱近代的な生き方を明らかにし、映像として記録することの 3 点である。

<平成 24 年度>

上記の目的を達成するため、平成 24 年度は南アジア研究、人類学、歴史学、差別論、モダニティ論にわたる学際的な先行研究のレビューを行った。また、ナグプル市において計 2 回の人類的調査を実施した。平成 25 年度にボトムアップの視点に立つ調査(上記の研究目的(2)および(3))を実施することに備え、平成 24 年度は特にナグプル市内の各宗教共同体の基礎的な情報を得ること(研究目的(1))を主要な目的とした。

第一次調査は平成 24 年 8 月 17 日から 9 月 5 日まで実施した。この調査では、ナグプル市内にある仏教とキリスト教の宗教施設を訪れ、特にキリスト教の聖職者へのインタビュー、教会が発行している資料の収集、また、各宗教信者の宗教実践について参与観察を行った。これに加え、ナグプル市郊の農村地域における仏教徒団体(NGO)の取り組み(学校運営や女性リーダーの育成など)について調査を開始した。次に、第二次調査は平成 24 年 11 月 22 日から 12 月 9 日まで行った。この調査では、仏教とキリスト教に加え、ナグプル市内のヒンドゥー教、イスラム教、シーク教、ジャイナ教の宗教施設を訪れ、各宗教信者の宗教実践について参与観察を行った。さらに、ナグプル市内だけでなく、近郊の農村地域における仏教徒組織の取り組み、プーナ市における仏教徒と他宗教信者の宗教社会運動、ムンバイ市の仏教徒によるアンベードカル入滅日の式典について調査を行った。

この計 2 回の調査により、(1) 仏教への改宗運動の中心地ナグプル市における各宗教の歴史と現状、(2) 仏教徒と他宗教徒、特にキリスト教徒との協調・対立関係、(3) ナ

ーグプル市、プーナ市、ムンバイ市における仏教徒団体の活動、(4) マハーラーシュトラ州の主要都市をつなぐ仏教徒たちのネットワークについて考察することができた。これらの現地調査では、現地で大学教員を務める2名の研究者を調査補助兼通訳として雇った。両者ともナーグプル市に加え、プーナ市やムンバイ市の宗教組織や施設などについて見識が深く、調査地の選定や通訳において重要な役割を果たした。また、学校運営や女性リーダー育成など、ナーグプル市近郊の農村地域における仏教徒団体(NGO)の取り組みについても調査を開始した。この成果を踏まえ、平成25年度より人類学と政治学の両学問分野における「市民社会」分野の先行研究を取り入れることとなった。このように今回の調査で現地NGOと良好な関係を構築できたことは新たな研究の発展につながるものであった。

<平成25年度>

平成25年度は、南アジア研究や人類学、モダニティ論などに加え、政治学分野の「市民社会」研究のレビューを行った。また、平成24年度の現地調査の成果を見直した後、第三次・第四次現地調査を実施した。平成24年度はナーグプル市内の各宗教共同体の基礎的な情報を得ること(研究目的(1))を主要な目的とし、現地調査を行ったことを踏まえ、平成25年度はよりミクロでボトムアップの視点に立った調査(研究目的(2)および(3))に取り組んだ。

第三次調査は、2013年8月17日から9月15日までナーグプル市及び近郊の農村地域で行った。まずナーグプル市では仏教徒の宗教実践への参与観察、仏教徒、「改宗キリスト教徒」、仏教僧佐々井へのインタビューを実施した。また8月30日の佐々井生誕祭に参加した。次に近郊の農村地域において仏教徒組織の取り組み(学校運営、飲料水浄化プロジェクト)について現地調査を実施した。第四次調査は2014年2月26日から3月14日までナーグプル市において実施した。第三次調査を継続し、仏教徒の宗教実践への参与観察、仏教徒、「改宗キリスト教徒」、仏教僧佐々井師へのインタビューを実施した。また、近郊の農村地域において学校運営や飲料水浄化プロジェクトに取り組んでいる仏教徒活動家へのインタビューを行った。また、ナーグプル市で最新の地図などを購入した。

平成24年度と同様、ナーグプル市における現地調査では、現地に滞在する仏教僧佐々井師の支援を受けるとともに、現地の大学教員1名が調査補助兼通訳を担当した。平成24年度の第一次・第二次調査を経て、研究計画で調査地として予定していたナーグプル駅に隣接するS地区において仏教徒組織の内部

分裂などから同地区の仏教徒たちの活動がほぼ停止状態に陥っていることが分かった。この状況を踏まえ、調査補助兼通訳者とともに新たな調査地を検討し、これらの再検討を経た上で第三次・第四次現地調査を行った。以上の2回の調査を通じて(1) 仏教徒活動家による改宗、一般の仏教徒による改宗、「改宗キリスト教徒」による改宗の間にある差異と類似点、(2) 仏教への改宗運動の中心地で生きる仏教徒がキリスト教へ改宗する理由と日常的な宗教実践、(3) 「改宗キリスト教徒」が直面する差別の構造、(4) 一般の仏教徒が神の視点に立つことで創出する宗教間対立を逃れる場のあり方、(5) 近郊農村における仏教徒組織の取り組みの概要が明らかとなった。今後は2年間の研究成果を取りまとめ、学術誌(『文化人類学』や『南アジア研究』など)や学会(文化人類学会や南アジア学会など)で研究成果を発表する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計1件)

根本達「一義化と両義性から考える仏教徒たちの歴史と視点 現代インドにおける改宗運動とマルバット供儀」、前川啓治編、『カルチュラル・インターフェースの人類学』所収、新曜社、2012年、pp64-83

6. 研究組織

(1) 研究代表者

根本 達(NEMOTO, Tatsushi)
筑波大学・人文社会系・助教
研究者番号：40575734